平成 30 年度

千葉大学先進科学プログラム入学者選考課題

課題論述

人間科学関連分野　方式Ⅱ

解答例

出題の意図

問題文は、かなり難解な文章である。前提となる知識を共有していない場合であっても文章を読みこなし、学術的な言い回しを解釈する基本能力があることを測る。さらに、自分にとって前提となる「近代的な発想」を相対化する思考を期待する。

解答の指針

問１

・近代以前における楽音と言葉の関係についてまとめる。（楽音とは言葉を送り出すための道具であり、音楽は発話の一種であると受け止められていた）

・西洋の古典的音楽は、音楽と言葉を完全に切り離した発想である。つまり、古典と名がついていながら、むしろ近代的な発想の音楽なのであることに言及する。

＊ここで言う「古典的」とは近代に対比する形容詞ではなく、音楽の一ジャンルを示す用語である。ただし、「古典」が音楽の一派であることを知っていなくとも、近代以前における言葉と歌の関係と、「古典的」音楽における言葉と歌の関係がまったく逆のものであることには気づいていれば良い。

問２

・ソシュールにとって言語が心理に内在するものであったこと、発話という物理的な現象からは独立していると考えたことに言及する。

・音と言語を完全に切り離す近代的理解に基づいた場合、どのような音楽が理想であるのかを考察する。そこから逆に、武満が“音楽にとっての不利益”と呼ぶものを導く。（歌の歌詞という余計な要素に注意を殺がれることで、音そのものに集中できないことが不利益とみなされている）

＊言葉と音楽に関する近代的理解と、純粋音楽に対する武満の考え方がどのように連動しているかを示すことで、加点する。

問３

・合理性・論理性とともに、自文化や近代を特権化しない公平な見解を評価の対象とする。

＊例えば、印刷技術の発展によって、書き言葉の地位が上昇したことに変化の原因を求めることができる。言葉が声や音ではなく、書かれた文字として普及するようになったことで、言葉を見るという行為の重要性が増したことをもって、言葉と音楽が切り離されたことの論拠とする。

＊あるいは、図から表記法の変化を見てとることができる。音楽を視覚的に再現することと、音楽を演奏するための手がかりを記述することは、同等の行為ではない。楽譜が音楽に匹敵する地位を失ったとき、音楽と言葉は切り離されたと主張することもできる。